



新井俊一

Shunichi Arai

ソフトウェア技術者も、 医師や弁護士のように個人の 腕で仕事ができたらいい

Shunichi
Arai

異色の人が集まるといわれる未踏ソフトウェア創造事業の開発者のなかでも、新井俊一氏（有限会社メロートン取締役社長）はすこし変わった経歴の持ち主だろう。かろうじて中学校を卒業したあと高校には進まなかった。

「学校が嫌いだったんですよ」と新井氏は話すが、けっして人嫌いではない。むしろ、人といっしょにいるのは楽しいのだが、集団行動はいやだったのだ。卒業したあとは、日々プログラムを書いたりしてすごしていたのである。

自分の力とやり方でプログラミング修行

新井氏は、幼稚園に入る前から父が買ってきたNECのPC-6001でコンピュータに親しんできた。当時のパソコンは、内蔵されているBASICインタープリタでプログラムを書かないと何もできない。自然ななりゆきとして、プログラムを書くようになっていた。プログラムでこれまではない何かをつくって、仕事を楽にしたり、人に喜んでもらえるのは楽しかった。

商業オンラインサービスのアスキーネットの会員だったので、すでにプログラム仲間ができていた。そのころから、ちょっとした仕事をもらえるようになっていたのである。アスキーネ

中学校を出た新井氏は、自分の力でプログラミングを覚え、未踏ソフトウェア創造事業でスーパークリエイターとして認められた。いまは、設立した会社でシステム開発に携わる一方、大学院の博士課程で認証システムを研究している。昨年はソフトウェア技術者協会も設立した。その自由な精神の技術者ライフを紹介したい。

ットには、コンピュータが好きなギークが集まり、中学生の新井氏の日から見て変わった経歴の人もいたので、人とは変わった道を選んでもなんとかなるだろうと思っていたのだ。

その後、いくつかのソフトウェア会社を経ながら、独立独歩でプログラムを書いてきたが、プログラム仲間のあいだで未踏ソフトウェア創造事業の制度が話題になり、ちょうど考えていたアイデアで応募することにした。

2001年度は、お気に入りサイトの更新状況を巡回チェックしてくれるアンテナソフトを開発した。当時もアンテナソフトはあったが、ユーザーのコンピュータにソフトをインストールしなければ使えなかった。新井氏はその必要がないようにWeb上で提供しようとしたのだ。

2002年度には、マイク入力の音声から音程を解析するプログラムを開発し、応用として口ずさんだメロディの音程があるかどうかをディスプレイで確かめられる「うたうたう」というプログラムを開発した。学習——というよりは遊んで楽しいソフトである。音声の解析は、アルゴリズムだけでなく、唄ってから解析した結果を表示するまでのタイムラグをいかに小さくするかが難しいところだ。新井氏はアセンブ

ラを使ってプログラムを高速化していった。この技術力が評価されて、「スーパークリエイター」と認められている。

アンテナソフトのほうは、テストをしているうちに同じ発想で作られた「はてなアンテナ」が普及してしまった。新井氏は「負けた!」と思ったが、教訓を得た。特にWeb関連のアイデアは、使ってもらえるシナリオを考えなければいけない。また、最初の荒削りなプログラムを仕上げまでもっていくには体力がいる。これがやりたいという熱意がなければ、人に使ってもらえるだけの洗練されたものではない。

プロジェクトの理想は、最大でも十人を 超えないプロ意識の高いチームだ

「未踏」プロジェクト後の新井氏は、いまは会社を設立し、企業から依頼されたシステムの開発や独自プロダクトを開発する一方で、大学院の博士課程でハードウェアと組み合わせた認証システムの研究を進めている。海外に出かけるのが好きで、海外で働くにはビザ取得のために学位があったほうが良いと考えて大学院に入ったのだが、取引先からの要望に応じて会社を設立したかたちになった。

仕事柄、いろいろな会社のシステム開発の現場を目にする。開発者がプロとして認められていない様子を目にする一方で、あまり勉強をしないプロ意識のない開発者もいる。これまで独力で勉強しながら自分の考えで仕事をしてきた新井氏にとって、すこし悲しい現実だ。

ソフトウェア開発は、技術者の属人的な能力によるところが大きい。大規模なシステムを開発する大会社も必要だろうが、町で開業している医師や弁護士のように、自分の名前で売っているソフトウェア技術者や小さい会社が、顧客のパートナーとして仕事をするようになったらいい。新井氏が目指すところである。

会社の経営者という立場になって、ビジネスに興味がでてきた。ビジネスとして考えるよう



になると、売れば評価されたという基準になる。それがおもしろい。

チャレンジしてマイナスになることはない

自分の力で独立してやっていくことには、難しい部分もある。技術とは関係のない、ビジネスの仕方、営業のことを学ばなければいけない。なかなか仕事がとれなくてアルバイトをするなど、苦しいことはあったが、失敗したからといって喰えなくなるわけではなかった。自分のやりたいようにチャレンジすることがマイナスになることはない、というのが新井氏の考えだ。

2005年に、ソフトウェア技術者連盟を設立した。ソフトウェアが社会に与える影響が大きくなり、技術を追うばかりではすまなくなったいま、ソフトウェア技術者をとりまくさまざまな問題を話し合う場にしたいと考えたのだ。

最近、名刺が切れて新しい名刺を発注することになった。「認定 天才プログラマー」と記載しようか、と陽気に語る新井氏の周りには自由な空気が取り巻いているように見えた。

DATA

有限会社メロートーン取締役社長。早稲田大学大学院在籍。ソフトウェア技術者連盟理事長。

<http://www.mellowtone.co.jp/>